
かじ師の外伝集(思いつき)

獅狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かじ師の外伝集（思いつき）

【Nコード】

N5669U

【作者名】

獅狼

【あらすじ】

これは戦うかじ師の本編とは違う

思いつきのそのときに書きたい話を書く

まあ、そんな物ですよ？

短編集みたいな

ネギまで・・・巻(前書き)

思いつきなので、いつも通り期待は無しの方向で見てください。
ノリが命？です

ネギまで・・・書

1・ネギま で大戦時に詠春に自重していない太刀を一本のあげちやった

「さて、詠春これから戦はより過激になっていくだろう。」

「ああ、そうだろうな。いきなり如何したんだ？」

「そこでだ、お前に俺の打った最上大業物の一本を上げよう。」

「本当にいきなりだな。だが俺は夕凧が有るから・・・」

「まあまあ、もしもの時のために貰っておけ、手首あたり術式書いてしまつて置けるようにしてやるから。」

「あ、ああ・・・」

「ついでに太刀で銘は断たち、単願刀・断だ。」

「単願刀？聞いた事が無いな、それにしても断つて、太刀とかけているのか？」

「まあ、そんな所だ。これを打つに置いて、自分にかなり強力な暗示をかけて雑念を一切消して、一つの想いのみこめて打った刀だから単願刀、他は落ちるがその一つに関しては比類なき力を込めている。」

「どんな刀だよ・・・使い辛くて仕方が無いぞ、なんだよ一つの思

いのみを込めてっ…」

「作成期間は三日間、飲まず食わずの休み無し貫徹、使う金属を選んで混ぜる所から初めて、磨いで鞘に装飾まで一切の妥協無しだ！
！」

「よりいつそう使い辛いわ！！」

「込めた思いは《あらゆるモノを断つ刀となれ》、おかげで空間ごと存在を断ち切るから切れないものはまったく無いと思う。使いすぎると世界の修正力に周辺空間ごと初期化リセットされるから・・・多くても二月に一閃にしろってね
単願にしたせいで矛盾を薄くする機能が付けられなかったんだ。」

「お前は普段どんな物を作っているんだ！何だ修正力って！！」

「ああ、でもココはかなり修正力と言うより問題原を消す力が弱いからそれ程でもないか、半月に一閃で良いよ。」

「話を聞けエエエエ！！！！」

墓守の宮殿にて

「フ・・・フフフ・・・まさか君はいまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・・だと？」

バスッ！！

「ナ、ナギイツ！！！」

「誰だ！？」

「！？いかんッ」

最強防護！！

パキヤアン

「ぬううっ」

「っラカン！！」

最強防護が一瞬で割れラカンも一瞬の拮抗が限界か！！

「使いたくなかったがっ、単願刀・断イ！！」

ラカンの腕が消し飛ぶギリギリ前に取り出せる。

なけなしの気を込めながら鞘から抜き放ち

そしてラカンの腕が持っていかれるのと同時に砲撃、その空間を断ち切り、残った砲撃が通り過ぎて行く・・・

ポカーン・・・

そんな擬音がしつくり来る状況だった・・・

味方はもちろん敵さんも顔は見えないがポカーンとしているに違い無い。

ただの一振りで人を数回殺しておつりが来る様な攻撃を無効化した

のだから・・・

いや、それじゃない。

まだ残っているのだ、他の所とは違う、まさに何も無いそして別のどこかに繋がっていると言っような矛盾した感じのする、他とは違う何か切れ目のような空間が・・・

そして墓守の宮殿、いや違う周辺の空間自体が僅かにそれで居ながら分かる用に振動しながら徐々にその空間が閉じていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とりあえず一番元気で動けそうなナギにこの太刀を貸して、あいつをこれで斬って来いと言って治療の方に回った。

俺の判断は間違っっていないと思う。ちゃんと使うときに魔力を込めすぎないように行っておいたしさ・・・もう、楽に成っっても良いよね・・・。

ラカンの腕の切断面の処置を手伝った後、ふっと意識を失った。

ネギまから・・・弐(前書き)

続いてしまった。

ネギまから・・・式

目が覚めたら其処は・・・

コンクリート製の部屋、ドアはなく鉄の棒で通路と仕切られている

窓は高い位置に子供でも通れないくらいの大きさの物が二つしかも内側に仕切りと同じで鉄の棒が着いている。

内装は洋式トイレ、硬そうな折り畳みベッド

うん、

「何で私は牢屋に入れられているんだああ！！！！！！」

「ん？ああ、すまない様式を間違えていたな。詠春は侍だからこっちか。」

檻の向こうから聞き覚えの有る声が聞こえてきたと思ったら

急に足元がコンクリートから畳に変わり壁、窓と順に木製に成り最後に檻が変わり

内装も相応な物に変わった。

うん、立派な座敷牢。

「そうじゃない！！なんで私はこんな所に居るんだ！！というより何だ今のは！！ってかお前か！！私を此処に入れたのは！！」

そう、私の目の前に居るのは私に単願刀・断を貸してくれた

（諸事情により修正されました。）だった！！

「ハアー・・・だつてお前、俺の注意、無視して短期間に二度も断を使ったじゃないかしかも一時間すら置かずに使うなんて信じられないよ。でも安心して！！君はちゃんと向こうにも存在しているよ。」

「いや、しかしアレは・・・つて、え？」

「言い訳は無用だ」

むこうの君は力の一部を失い忒の太刀とかの技が使えなくなっている状態だがしっかり存在している。」

更に これで物語に過ぎた異常は起さないね とつぶやく。

何の話かは分からないがそれより現状を如何するかだ。

「わー」そして違反を起して魔法世界を崩壊寸前に追いやって俺の手を煩わせたお前には玩具に成ってもらおう。「・・・どういうことだ？」

「先ずお前は魂の一部を切り出して其処から複製したような存在だ。向こうのお前の魂は修復に二十年かかるだろう。そういう風にやっ

たからな。

そしてお前は危つくあの周辺一体を魔力もクソも無い本来有るべき姿に戻しそうになった。

それは魔法世界を崩壊へ導きかねない現象でもあった。仕方なく俺はそれを秀礼するためにいろいろと苦労をした。させられた

それで、だ。

そんなことをさせたお前には俺もそろそろ作ろうと思っていた宝具の作成を手伝ってもらおう。」

「…宝…具？」

「そう、宝具だ。

宝具とは大衆の願いとか想いによって定義された簡単に言うとなら強力なマジックアイテムだ。

普通に存在するマジックアイテムには無い神秘という特殊な力を持っている。

神秘は神秘によってしか壊せない。

あるいは膨大な魔力で力づくつても出来るがそれは、置いておくう。

要するにとある過去に行ってもらい有る武器を使って英雄格に成ってもらう。

なーに一度英雄になった君になら出来ると信じているよ。」

「ちょ、ま」さて、お前に使ってもらうのはこの気刀・礼だな。

この刀は特殊で気によって特殊な力を持つ事が有る。

ちゃんとした担い手に成ってもらうために、ヒントしかやらん。狙ったとおりの物が出来るのもつまらんからな。

本当に逝ってもまたやり直させるから頑張った方がお前のためだがな。

頑張つて来い。」

「だから話をッ．．．．．」

—
—
—

続いてしまった

ネギまから・・・式(後書き)

ネタをプリーズ

何処の陣営に着かせよう・・・もしくは傭兵軍

F a t e . . . おまけ版 予告？（前書き）

釣られて、書いたサーバント情報、それで書いてみたくなった。

つい、やっちゃったんだ

書く予定は 今の所無いんだけど

Fate・・・おまけ版 予告？

「あゝあ、お母様もキリツグも行っちゃった・・・・・・・・・・なんだか寂しいな・・・・・・・・」

「あれ？なんかこの部屋から微かに光が？・・・・・・・・ここは・・・キリツグがセイバーを召還した部屋？」

「中に誰も居ない・・・明かりも付けてない・・・・・・・・あれ？魔方阵がほんのり光ってる？」

「イタツ・・・これは？・・・きゃ！！眩しい」

「問う！！、き・・・・・・・・君が俺のマスター・・・・・・・・なのか？」

呼ばれたのは正史とは違うキャラクター魔術師。

「え？え？どういうこと？」

困惑するマスター

「一体どうして・・・種？・・・これは・・・・・・・・なるほど、これが触媒になったのか・・・」

一粒の種によって呼ばれた英雄とまだ幼きマスターの物語。サーバント

「キャスター!!!これ美味しいし、何か凄い!!!」

「H A H A H A そうだろマスター俺の宝具を持って作った食材に我が腕たくひんによる料理だ!!!不味いはずが無い!!!」

「そして栄養価も魔力も豊富だ。正直に言ってしまうえば俺ならこの食材をうまく使い対象の将来を在る程度決めることが出来る!!!」
ドオオオオン!!!

「な、なんですってえええ!!!きゃ、キャスター・・・」

「なに、マスター何も言わなくて良い、ちゃんとしたメニューで作っている。現状でも数%は将来が約束されている!!!」

「よくやってくれたわキャスター!!!」

「なんのなんの、ただ・・・人によってはどれだけ俺が頑張っても残念な人も居たがな、気をつけることだ。」

「うん、私頑張るわ!!!」

「そろそろ、召還されて五日か・・・マスター、そろそろ戦ほん場ほんへ向かわないか?」

「え？どうして？」

「私はそのために呼ばれたようだからな、それに何処かの組織や魔術師が介入して来ても面倒だろ？」

「それにだ、行って、お前の母や父を驚かせて見たくは無いか？」

「お母様やキリツグを？……うん！！」

「よし、じゃあ行こうか何で行く？飛行機？船？それとも俺？」

「え？キャスター？どうやって？」

「魔術だよ、だってほら、俺、キャスター魔術師じゃん。

キャスター「ぶっちゃけ、今まで俺がやってきたこと魔術師と言うより……ファーマー農業者じゃん？そろそろ本分に戻って見たいなーって。」

「あー、そう言えばそうね。でもどういう方法で？空飛んで？もしかして空間転移！？」

「マスターのお好きな方法で、」

「日本よ！！私は「えい！！」痛いツ……マスター何故蹴る。」

「なんか、言わせちゃいけない気がする……それよりもお腹す

いたー!!」

「おーそうかそうか、じゃ、アインツベルンの城に行こうか、食材その他は持ってきたから少し掃除してから食事としよう。」

マスターが食べている間、私は工房製作を行うことにしようと思っ
が・・・いいか？」

「えー一緒に食べましょうよ」

「いや、今後の食料のためなのだが・・・最も新鮮なのを食べさせ
たかったのだが・・・マスターがそういうのなら仕方がない、明
日は今日の残りの材料を・・・」

「ごめんなさい。お願いします。」

「外敵排除のためでも在るしな。城に蔦を絡ませるが構わないか？」

「ええ、構わないわ、キヤスターなら汚くは・・・いえ、むしろ
今より華やかで綺麗にしてくれそうね。」

「ああ、せいぜい期待に答えるでしょう。あちらでは育てられな
ったものが育てられるからな、絶景にしてやるわ。」

そして再会、

「い、イリヤ!?!」

「何!？」

「あ、お母様にキリツグ!!久しぶり」

戦闘、

「さて、それでは戦争を始めましょう。」

「ハッ!!^{キャスター}魔術師風情が表に出てくるとは気でも違えたか？」

「クカカカカ、ただの収集家の貴様こそよく戦場に足を運んできたなあ」

焼死凍死溺死圧死爆死病死感電死笑死出血死ショック死、さあ、どんな死に方がお望みか？」

しかし、

「やはり分が悪いか・・・サーバントとして召還されて超が付くほどの消耗品化した挙句一つ作るのに三日は掛かるから使いたくは無かったんだが・・・いや、今が使うときか」

「弾幕ごっこ洒落込もうか。」

覚悟しろよ？英雄王。そして・・・」

「ちょ、なんだよあれ、何であの規模の魔術を連発できるんだよ！
！」

「むっ、やはり欲しいな・・・」

そして終焉

「令呪を持って命ず、セイバー、聖杯を破壊しろ！！」

「なッ！！」

「っち、ばら撒かれちまったか・・・まあ良い疲れるが集めるだけだ。」

これを手に入れるために参加したんだ、しっかり回収させてもらおうぜ。

魔剣の素材をな!!」

F a t e . . . おまけ版 予告? (後書き)

やって欲しいという人がいれば書きます。

If Fate マスター編 阿呑 (前書き)

やっちゃった

ゴメンナサイ……
なんとなく……やりたくなっただんです。

反省も後悔も……シテイナイハズデス。

If Fate マスター編 阿香

転生して20年。

3回目のタイムプーン世界への訪問で俺は漸く、冬木市に転生し、マスターとなった。

魔方阵を描き、召喚する時間を決め、クラスを指定し、触媒を用意した。

そして今はその時間の数分前・・・

「さて、これを陣の真ん中に置き・・・

前略^{カット}

此処^{告げる}に汝の血を

汝の身は我が下に、我が命運は汝の筋肉に。

聖杯の寄るべに従い、我が声聞こえるならば応えよ
今再び誓いを此処に。

我は汝に与えし者、

我は汝を導きし者。

汝、その眼を筋肉に曇らせ侍るべし。汝、狂気の檻に囚われし者。
我はその狂気を従える者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ
「！」

「ぶるうあああ!!」

サアヴァントオ、ヴァーサアーカアー今ア再びイ主の呼び声に応じ
参上したあああ!!」

「・・・よく来たな。さあ、再開の一杯(DCS)だ。再び我らの
力、示すでしょう。」

「是非もない!!王の言う事だあ、我が反対する理由がない。」

「ハア・・・馬鹿だというわけではないのだ、少しは自分で考える
こともしろ。」

「ぬう・・・別に考えていないと言う訳ではないのだが・・・た
だ、筋肉が言うのだ此度の戦争、何かがおかしいと・・・」

「相変わらず、筋肉教(狂)か・・・しかし八割がた当たっている
のがその怖いところだな。」

そのとおり、問題があり、それをどうにかするため生き残る必要が
ある。後は、解るな?」

「承知、我等はあ守りに徹し、襲撃を受ければあ反撃を行い、終局
まで生き残るう・・・それでいいのだなあ?」

「ああ、そのとおり。だが、別に籠城するわけではない。自ら捜さないだけで誘われれば自分の考えで戦闘しても問題ない。」

「御意」

「頼りにしているぞ、』阿?』。」

クラス：ヴァーサーカー

真名：阿?^{アドン} 性別：漢 身長・体重：315?・452?
属性：混沌・狂

マスター：白黒シラクロ 灰根ハイネ

能力値

筋力 A +

魔力 E -

耐久 A +

幸運 C +

敏捷 B

宝具 A ~ B

クラススキル

狂化：B

パラメーターを1つつランクアップさせるが、理性の大半を奪われる。

しかし、彼の場合それとは違い、特定条件下でのみ発動、パラメーターを1つつランクアップし、一切の制御を受け付けなくなる、その力は令呪による命令ですら跳ね除ける。

保有スキル

戦闘続行：A

生還能力。瀕死の傷でも戦闘を続け、決定的な致命傷を負わない限り生き延びる。

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

一人軍隊：A

対軍戦などの、対多での戦闘時に筋力、耐久、俊敏がワンランク上

がる。

筋肉の加護：E X

筋肉の加護により精神干渉無効及び物理損傷ダメージが軽減される。

筋肉の導き：A

筋肉が危険等を知らせてくれる。

直感と言い換えることができる。

神性：B

筋肉教で神の代理人と呼ばれて、神とほぼ同一視されているためこれだけの神性を持つ。

宝具

・筋肉教開祖の三大特典 ランク E } A レンジ 1 } 最

大補足 60億余り 人

筋肉で通じる筋肉教徒から筋肉の力を筋肉の導きで受けられると言
う宝具

以下の三つの効果がある。

なお応えてくれた者からの力の受け渡し増減により補正がかかる。

筋肉教開祖特典：壱【筋肉再生（教）】

筋肉の損傷が筋肉教徒の質と数に応じた速度で再生する。

筋肉教開祖特典：弐【十全筋肉】

己の筋肉の力を十全に発揮できる。

【筋肉再生（教）】の存在が前提となる

筋肉教開祖特典：参【筋肉玉】

世界に存在する教徒の筋肉から少しずつ熱量をもらい集め、それを球体型にする。
応用は本人次第。

鋼の筋肉 マッソウボテ ランク B レンジ 0 最大補足 1 人

筋肉の密度が異常で固すぎる、伝承ではその硬さのあまり、斬撃が通用しなかったという事から発生。

常時発動で業物業以下の切れ味の斬撃を弾き一切のダメージを負わない。

ワイルドアップ 筋肉肥大化により五分間斬撃が一切通じなくなる。
ただし、二時間に一回の使用制限がかかっている。

皇鉄槌 ランク B ・ レンジ 3 最大補足 30
あまりにも巨大な鉄槌、過去にも彼以外に持てた者は居ないと言われる。

柄が3m頭の片側が直径1m近い平面で中心部はもう少し大きく、反対側は荒い円錐のようになっている

王猪戦車 下スフヤン ランク B レンジ 5 最大補足 10 人

全長5m超の猪二頭が引つ張る戦車、とても頑丈で、皇鉄槌を載せてもビクともせず走行可能。

新年初投稿 Ifもし阿香がセイバーなら / Zero (前書き)

明けましてオメデトウございます

本当は昨日の投稿を目指していたのですが・・・無理でした。

セイバーだと掛け合いが大変なので続くことはほとんど在りません。
つてか、3m級の巨人がアイリスフィールと歩く姿が完全に美女と
野獣www

唯、見てみたくはあります。アイリがイリヤと同じように見えるw
ww

やっちやえ、セイバー!!!www

新年初投稿 Ifもし阿香がセイバーなら / Zero

「サアーヴァントオ……セイヴァー召喚に応じ参上したあ。

貴様があ、私のマスターかあ？」

「ああそうだ、しかし、アーサー王がこんな巨漢だとはな……」

「はあ？なアにをいつているう？」

我エの真名は阿香、最高にして最強で最硬の筋肉を持つ者だあ！！」

ワイルドアップ
「筋肉完全始動」

ビキイイイ！！

「……………召喚を失敗した！？ツク如何する、大幅なプランの変更が……………先ずは如何言う英霊か調べないと……………名前からして中国辺りか？」

「ハツハア、何を心配しているう、我は正ツ面からア打ち砕く事があ最も得意なのだあ、更には小細工などお必要ないイ！！
我が筋肉を持つてすれば唯の大槌が破城槌となるうう！！」

「……………本気か？いや、正気か？」

「ナアアア二をオ今更あそつちの女はもう気付いているようだがあ？」

「なっ・・・アイリ、如何言う事なんだ？」

「・・・ステータスを見ていたのだけど・・・ついさっき、名乗りの直後に破城撃と言うスキルが追加されて・・・鋼鉄製の武器なら使い捨てで城壁を爆砕するだけの威力が出せるって・・・」

「ほ、本当なのかい？」

「ええ、更に耐久がB+からA+に上がって腕力がAからEX表記に・・・」

「又ウ、ウツカリ筋肉^{ビルドアップ}完全始動を使ってしまったようだ。」

「・・・何だ、そのビルドアップとは・・・」

「・・・宝具の一種かしら？」

「ウム、そう言う事に成るのかのう・・・我が王は之を使うと『刃物が一切通らなくなる・・・お前、本当に人から外れてきたな』と言ったな。まあ、その他にも『お前、何で業物でも筋肉で止まるんだよ』とか『一人で投石器数台分だよな、おかしいだろ水平射出であそこまで飛ぶとか・・・』と我が筋肉を『既に知られている物を外れた筋肉だな、当に既知外』と褒めてくれたな。」

（（確かに褒めてはいるんだろうが絶対に少しずれてる））

「ヴィルドアップは王が言うに《力が強くなり筋肉が硬質に成って耐久力がおかしくなる。その筋肉のおかげで瞬発な動きも少し早くなるな、強力な弓のような物か？》だそうだ。」

「あの……さつきから気に成っていたのだけど王って？」

「ぬ？」

「あ……そうか、そこから何処の英雄か知る事が……」

「又ウ……王は王だろう……」

「いや、名前を聞いているのだが……」

「………又ウ………確
か………外で名乗っていたのが………白・
・玄………蒼………朱………だったか
？真名は白黒灰根だった筈だ。」

「白、黒、青、赤？」

「否、白玄蒼朱だ、すまぬな方位の四聖獣の色からだと覚えていた
のでな。」

（検索が終わったか………検索結果500件以上！？しかも世界各国の歴史書伝説に残っているだ！？）

「そういえば……王は……歴史に合わない武器だから極力使いたくないと超高速で鉄粒を飛ばす筒を作っていたりもしたナア……
まあ、ボウガンの方が強かったがな。」

HHHHHAといわんばかりに豪快に笑う阿呑。

「ちよつと待て、今、明かにおかしなことを……」

「・・・良くぞ来た・・・まったくどういつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり、しかし、お前は見た目通りの猛者のようだな・・・」

「ハツハア、そういう貴様もおよっぱどだなあ不意打ちを考えなかったのか？」

「キャスターは拠点から出て来ないだろうし、最も可能性の高いアサシンはもう退場した、アーチャーは・・・そのようなことをしように無いのでな。セイバー、バーサーカー、ライダーはそれに適さないだろう。もし来た所で返り討ちにするまでだ。」

「そしてお前は・・・セイバーかライダーだと見るが如何に？」

「ハツハア確かに、我は後者三クラス全てに成り得るがぁ今回はセイヴァーとして現界している。そういう貴様はランサーだな？」

「いかにも。……ふん、これより死合おうという相手と、尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ……」

「ハッ、我は言葉を交わすよりい、武を交わしい語り合う方が性に合っているう……」

故に!!

さあ、構えよお!!」

「ならば、早々に武器を取り出せ!! 剣を持たぬ剣兵を相手に俺に武器を振るえと言っのか!!」

「我はあこのツ肉きんツ体にくこそ最ツ大のオ武器也イイ!! それでも我に剣を出させたくばあ本気にさせてみよオオ!!」

「ツチ、俺を甘く見たことを後悔するがいい!!」

「ツチイ（何故だ確りと当たったはずなのに何故、薄皮程度の傷しか受けぬ！！）ならば！！」

「フン！！温いわあ！！」

「ツク（拳に合わせたがやはり直後受け流されるか！？しかし何だ？今のまるで金属同士打ち合った様な手応えは！！）・・・」

「ハッ、その様な様子見てえ我の筋肉にい傷を付けれると思うなあ！！様子見など捨てて全力で向かって来い！！さもなくばあ、この身に傷を負わせる前に無残に散ると思ええええ！！」

「　　ツ失礼した、宝具は使えぬが本気で行かせて貰うッ！！」

「又ウ！？」

「フウウウツ（六十合以上で漸くこの程度かあちらの攻撃も拳撃を繰り出すと言うより拳を押し込もうとする明らかに通常打撃ではなく押し込もうとする動きだつまりこの威力がこれ以上に出て来るのか！？）このツ化物め！！」

「ハッハッハア、よく言われる！！しかし、良く此処まで生き残り原形を留め我が全力の筋肉に微かなながらも傷を負わせたあ！！ちよつど良い

頃合限界だあ！！さあ、之が我が剣！！刮目せよ！！」

「それが・・・剣、だと？ツチイ化物めエエ！！」

取り出すは、全長3m越えの荒々しくもしつかりと打たれた巨大な片刃刀、正直これ相手に防御もクソも無いだろう。

「だがあ、良く六分持たせたあ、よかつたなあ、此処からはあもう少しイまともな戦いに成るだろう・・・」

「・・・」

ランサー、これ以上勝負を長引かせるな、そのセイバーは難敵だ。速やかに処理せよ・・・宝具の開帳を許す

「了解した。わが主よ」

「ん？今のはあお前のマスターかあ？戦場に居るのにい何あ故え出てこんのだ？発言までしてえ・・・自分が何処にいるかをばらしているにも関わらずっ」

「！！」

「！！・・・セイバー、あなたランサーのマスターが何処にいるか分かるの！？」

「又ウ？分からぬのかあ？今のでえおおよその方向は分かったあ・・・もう一度お聞けば完全に分かるだろう」

「・・・ここからは殺りに行かせてもらう！！」

「安心しろ、我は唯あ、正ツ面から打ち砕くのみイイ！！後からの不意討ちなんぞお遣り難くてえ仕方が無いわああ！！」

「ツクその巨塊をその速度で振るか・・・クラスを間違えたのでは

ないか!？」

「ハツハア!! ヴァー スアー カー 成らばもつと手に負えぬよ!!
なんせ常時全力だからな!!」

「……ツ訳の分からぬ事を!!」

「わが名は征服王イスカンドル、此度の聖杯戦争ではライダーのク
ラスで現界している。」

「何を……考えてやがりますかこの馬ッ鹿はああああ!!」

中略

「ひとつわが軍門に降り、聖杯を譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である。」

「……………」

「先に名乗った心意気には、まあ感服せんでもないが……その提案は承服しかねる」

「俺が聖杯を捧げるのは今生で誓いを交わした新たなる君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞライダー」

「同じく、今の主を言う以前にい我が王は生前死後唯あ一人のみだあ……！」

「唯あその筋肉と戦車は褒めておこう……！」

「……………」

（（（そこ！？）））

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5669u/>

かじ師の外伝集(思いつき)

2012年1月2日11時49分発行